

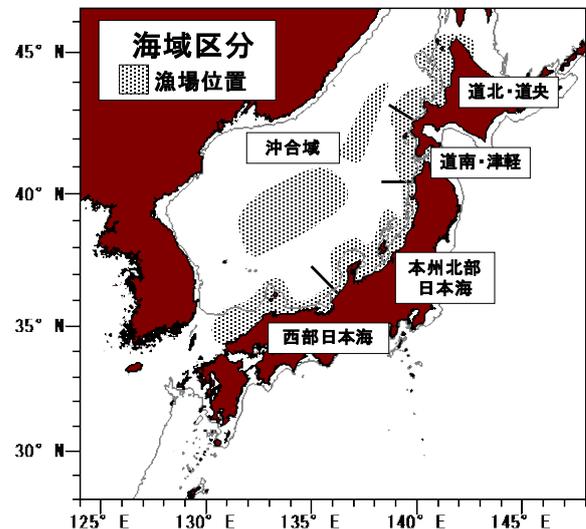


2021年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2021年8月～12月)のポイント

- ・今期の全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
- ・道北・道央では前年および近年平均を下回る。
- ・道南・津軽では前年および近年平均を下回る。
- ・本州北部日本海では8月まで漁場が形成されるが前年および近年平均を下回る。
- ・西部日本海では8月まで漁場が形成され、前年および近年平均並。
- ・沖合域では前年および近年平均を下回る。漁場は、北海道西沖では形成されにくく、大和堆周辺海域では形成されても安定しない。



* 近年は最近5年間(2016年～2020年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜）

森永

浮魚資源部（横浜）

大島、久保田

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2021年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2021年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：今期の前半は前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までと10月～11月に来遊のピークがある。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までに来遊のピークがある。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：前年同様、8月まで漁場が形成される。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均並。
- (2) 漁期・漁場：前年同様、8月まで漁場が形成されるが、10月～12月は漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：北海道西沖では形成されにくい。大和堆周辺海域では形成されても安定しない。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2016年～2020年）の平均、前年は2020年を示す。

I 予報の説明

2021年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（2021年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および9月までの海況予報（2021年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、7月～8月と10月～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群も漁獲対象となる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は例年になく少なく、前年を下回った。本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。また、日本海スルメイカ漁場一斉調査において、今後、当海域に北上してくると考えられる道南・津軽海域の分布量も前年を下回った。以上のことから、今期前半の来遊は前年および近年平均を下回ると予測される。今期後半については冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では近年、6月～8月に漁獲量のピークがある。また、11月～12月には、夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象とした漁獲のピークができる場合がある。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年を下回った。本海域における6月の漁獲量も、前年および近年平均を下回った。今期後半の本海域への来遊量に関係する太平洋側の9月までの来遊は、前年を下回ると予測されている。以上のことから、今期の来遊は前年および近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、5月～7月が漁期の中心で、8月～11月には好漁場が形成されない。12月の漁場形成には、海況の影響が大きいと考えられる。

【今期の情報と予報の説明】 7月中旬時点において、能登半島周辺および佐渡周辺で漁場が継続して形成されており、8月も漁場が形成されると予測されるものの、本海域における6月までの漁獲量は前年および近年平均を下回っており、来遊量は多くはないと予測される。また、今期後半の目安となる日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）は前年および近年平均を下回っており、今期後半に沖合から来遊する群は前年より少ないと予測される。なお、12月の漁況は沖合冷水の張り出しとの関係が大きく、現時点では来遊量を予測できない。以上のことから、今期は前半での来遊がある程度継続するものの、全体としては前年および近年平均を下回ると予測される。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は10月～12月の南下群の来遊が少なく、漁場が形成されにくい。

【今期の情報と予報の説明】 本海域での6月の漁獲は前年および近年平均を上回った。また7月中旬時点において、福井県沖および兵庫県沖で漁場が形成されていることから、前年および前々年のように8月にも漁場が形成されると予測される。一方で、今期後半の来遊量の目安となる日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUEは前年および近年平均を下回っており、今期後半に沖合から来遊する群は前年より少なく、近年同様10月～12月には漁場が形成されにくいと予測される。以上のことから、今期全体としては前年および近年平均並と予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 沖合域では従来、6月～12月にかけて大和堆周辺海域に漁場が形成され、また水温の高い8月下旬～9月には北海道西沖にも漁場が形成されてきた。しかし、2000年代以降漁場が北偏化し、8月～11月は主に北海道西沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では6月～7月および11月～12月に漁場が形成される年が多くなった。さらに2019年以降は、これまでの傾向と異なり、大和堆や北海道西沖で漁場が安定して形成されず、能登半島周辺や佐渡沖が主漁場となる場合がある。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果による本海域の分布量は、前年を下回った。また、2019年以降の分布量（漁場一斉調査の沖合域の平均CPUE）は、極めてCPUEが高い数点で引き上げられる影響が大きく（Ⅱ-1-1）にて詳述）、広く分布が見られた2018年以前とは状況が異なることに注意を要する。以上から、今期の本海域への来遊は前年および近年平均を下回ると予測される。また日本海スルメイカ漁場一斉調査における沖合域での分布は前年に類似し、さらに北海道西沖での分布量が極めて少ないことから、前年同様、北海道西沖は漁場となりにくく、大和堆周辺海域での漁場は形成されても安定しないと予測される。

Ⅱ 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、日本海側の7道県および水産研究・教育機構による調査船でのいか釣り試験操業（6月中旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

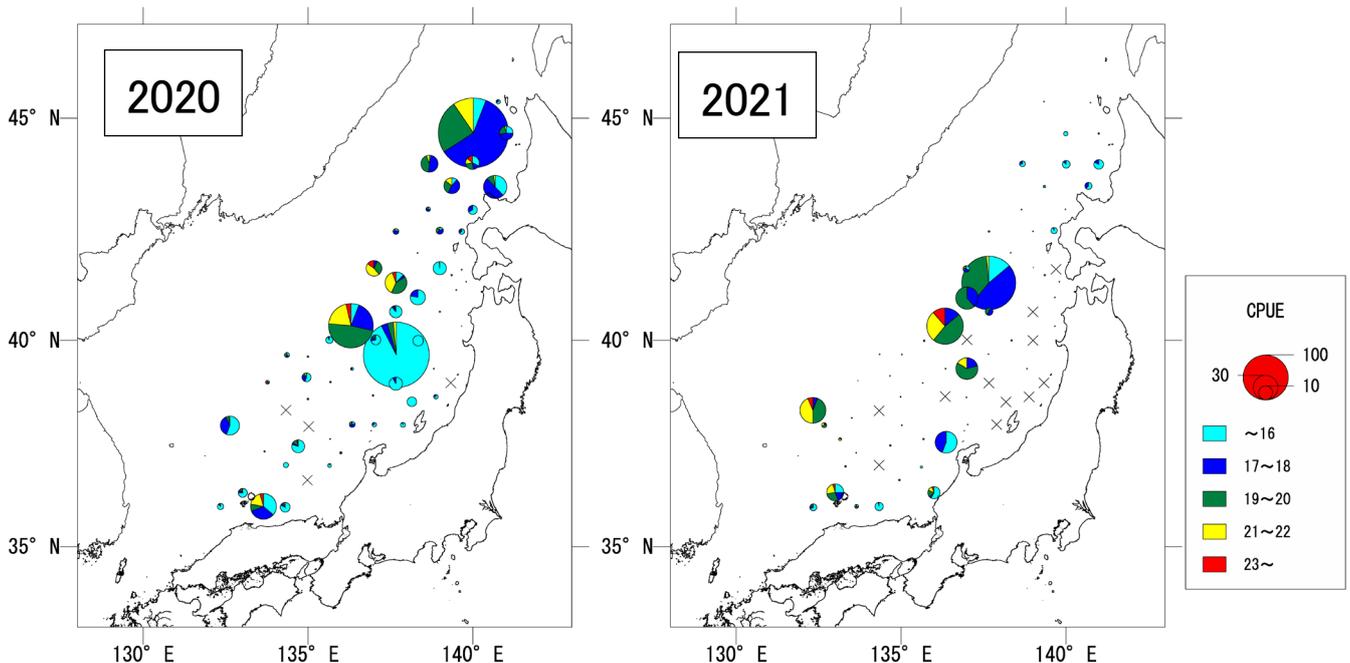


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2020年と2021年の調査結果）

図中×は漁獲がなかった点を示し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示す。また各色は各外套背長範囲（cm台）の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長14cm台～17cm台の個体を中心に採集された。例年、当該海域は本調査においてスルメイカが相対的に高密度で分布する海域であったが、今期は分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）は最大でも5尾と、例年と異なり分布量が極めて少なかった。
- (2) 道南・津軽海域では、外套背長14cm台～16cm台の個体を中心に採集された。CPUEは檜山沖の2尾が最大で、他の点は0.1尾以下で、漁獲のない点もあった。
- (3) 本州北部日本海では、外套背長15cm台～18cm台の個体を中心に採集された。CPUEは能登北西の点で24尾であったほかは0.2尾を下回り、漁獲のない点もあった。
- (4) 西部日本海では、外套背長12cm台～22cm台まで、幅広いサイズの個体が採集された。CPUEは隠岐北西の点で15尾、福井県沖の点で8尾の他は4尾を下回り、漁獲のない点もあった。

(5) 沖合域では、外套背長18cm台～20cm台を中心に採集された。CPUEは北緯41度20分、東経137度40分の点での143尾が最大で、次いで北緯40度20分、東経136度20分の点で65尾となった。分布の傾向は例年とは異なるが、前年と類似した。すなわち、例年CPUEの高い大和堆周辺では低く、大和堆から北東に外れた沖合域で高い傾向にあった。また漁獲のない点もあった。

以上のように、今期の本調査の分布で例年と大きく異なる点として、①北海道西沖での分布が極めて少ないこと、②大和堆周辺海域での分布が極めて少ない一方、大和堆から北東に外れた沖合域で分布密度が高かったことが挙げられる。このうち、②については前年から引き続いて観察された傾向であった。さらに2019年以降、沖合域や西部日本海に分布密度の高い調査点がいくつかある一方で、漁獲が極めて少なかった、もしくは漁獲がなかった調査点が多いことに注意を要する。

2) 全調査点の平均 CPUE

本調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を日本海への来遊量の目安として示した。日本海スルメイカ漁場一斉調査の平均CPUEは、1980年代には低かったが1990年代に上昇し、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた（図2）。2003年以降は概ね15尾前後で推移していたが、近年は低下傾向にあった。2021年は5.43尾で、前年（14.32尾）および近年平均（10.98尾）を下回り、また近年の中でも低かった2019年（7.40尾）も下回った。

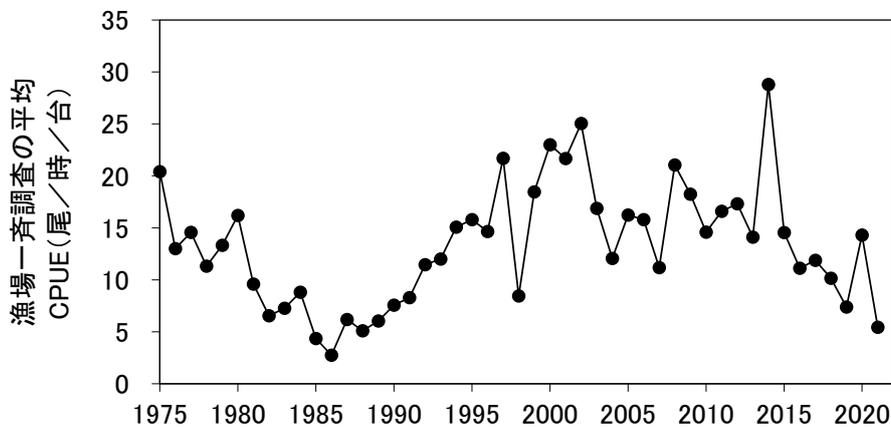


図2 日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）の推移

3) 魚体の大きさ

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUEで重み付けした外套背長組成を図3に示す。2021年は18cm台～19cm台に外套背長組成のモードがあった。外套背長組成のモードは前年より大きく、近年平均程度であった。

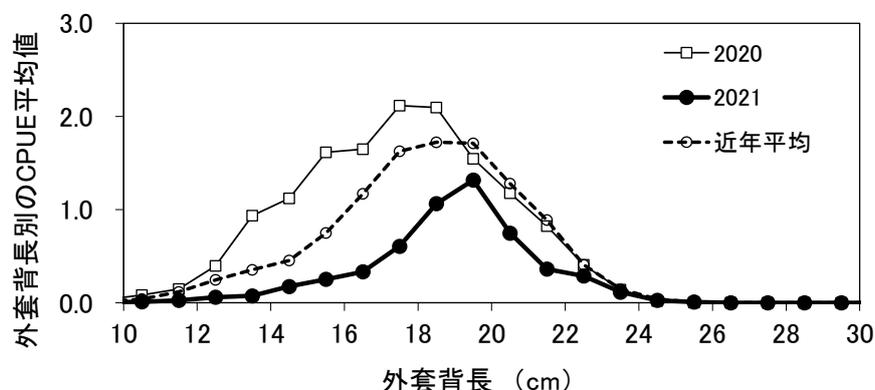


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す

2. 2021年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2021年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2021年4月以降の漁獲量（4海域合計）を月別に見ると、4月は前年並であったが5月以降前年および近年平均を下回った。道北・道央では、例年通り6月に漁獲が開始され

たが、6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。道南・津軽でも例年通り6月から漁獲が本格化したが、6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。本州北部日本海での漁獲量は、4月は前年並で、5月以降前年および近年平均を下回った。本州北部日本海での漁場の中心は前年と同様、能登半島周辺であった。西部日本海での漁獲量は、4月は前年および近年平均を下回ったが、その後増加し、6月には前年および近年平均を上回った。以上のように、いか釣り漁業が主体となる生鮮スルメイカの漁獲は6月まで全般に少なかった。その一方、2019年および2020年に主に石川県以北の底びき網漁業でスルメイカの漁獲が増加傾向*1)であったところ、2021年漁期も同様の傾向が見られている（詳細は未集計）。

*1) 2020年度スルメイカ秋季発生系群資源評価 <http://abchan.fra.go.jp/digests2020/details/202019.pdf>

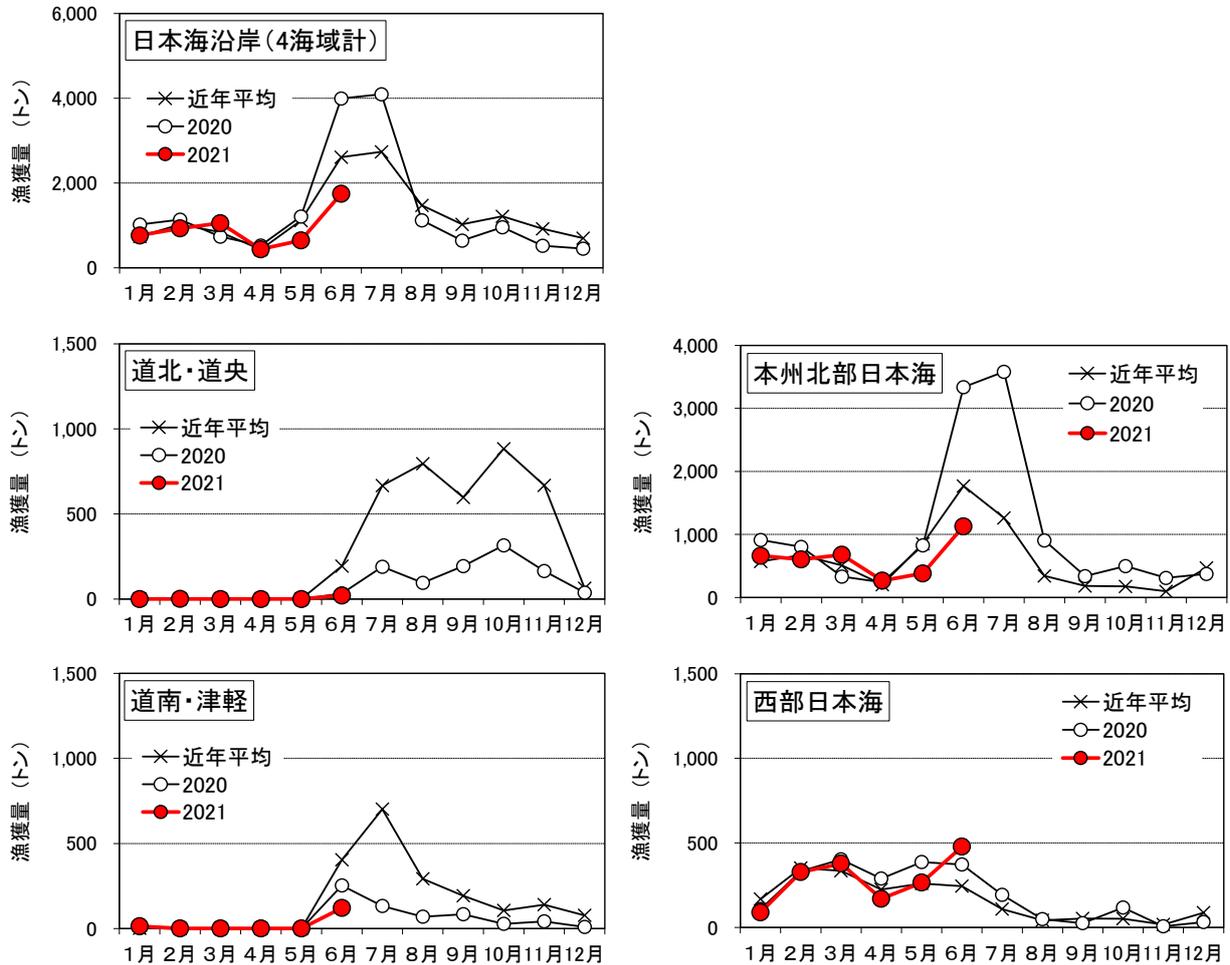


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの主要港漁獲量
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成

3. 太平洋側（冬季発生系群）の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の漁況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

2021年度第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報（7月30日発表）では、8月～9月の太平洋側への来遊は、道東太平洋海域、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域のいずれの海域でも前年を下回ると予測されている。

4. 日本海の海況予測

2021年度第2回日本海海況予報*2)（7月9日発表）によれば、7月中旬～9月の対馬暖流域の表面水温は“平年並み”*3)、対馬暖流域の50m深水温は日本海西部及び北部ともに“かなり高め”*3)と予測されている。

*2) <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2021/20210709/index.html>

*3) “平年並み”は2年に1回の出現確率で、平年値±0.5℃程度の水温。“かなり高め”は7年に1回の出現確率で、平年値から1.5℃程度の高さ。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所